

市史通信

第25号

【発行日】2016年3月31日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜市中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 so-sisiryou@city.yokohama.jp
 【ホームページ】
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/gyosei/sisi/>

【目次】

- 原節子と川喜多かしこ
—横浜の二人の映画人
- 昭和初期横浜市の指定名木
- 横浜とハワイ
- アンケート集計結果より
- 開架資料紹介
横浜空襲・戦災誌編集委員会
『調査概報』
- 市史資料室たより



川喜多かしこ（左）と原節子 ベルリン・ブランデンブルグ門の前で
 昭和12（1937）年3月～4月 公益財団法人川喜多記念映画文化財団所蔵
 川喜多は原の振り袖姿を「うっとりする程美しい、こんなに飽きの来ない
 深みのある美しさを持った人は日本人では少ないと思う」と日記にしたためた。

原節子と川喜多かしこ

—横浜の二人の映画人

昨年（平成二七年）一月二五日の新聞各紙は、映画女優・原節子が九月五日に亡くなったことを報じた。享年九五歳。『神奈川新聞』は、原を「横浜が生んだ国民的女優」と紹介した。多くの日本人に支持された横浜出身の芸能人として、原は歌手・美空ひばりと双壁であろう。

『神奈川新聞』の前身『横浜貿易新報』は、昭和一〇（一九三五）年六月二八日号で「銀幕にまたハマの星が現はれた、最近日活に入社した原節子さんがそのハマッ子スターとして断然輝かうといふわけである」と、そのデビュー記事の冒頭で記していた。

「ハマッ子スター」から「横浜が生んだ国民的女優」まで、記事の歳月は八〇年が経過している。原節子は一五歳でデビューし、最後の出演作「忠臣蔵 花の巻・雪の巻」まで二八年間スクリーンの花であった。その年月の始点はサイレントからトーキーへの転換期と、終点は映画の最盛期をへて下降し始めた時期とに相当している。原節子は、まさに日本映画黄金時代を体現したトップ・スターで、原にあこがれて映画界を目指した女優も少なくない。その後、キャリアには倍する五三年の年月が経過した。映画スクリーンから理由を告げずに姿を消した原節子

を語る論者の数はおびただしい。「国民的女優」の重みは、この半世紀のあいだにこそ培われたといえる。そして生きながら「伝説の女優」となった彼女は、名実ともに「伝説」のなかで生き続ける存在となった。

平成一七（二〇〇五）年の横浜都市発展記念館「シネマ・シテイ」横浜と映画」の図録には、二点、原節子が登場するページがある。「輸入映画の新しい波 東和商事と川喜多かしこ」の部分である。川喜多長政・かしこ夫妻は、映画輸入会社「東和商事合資会社」を経営し、昭和一二（一九三七）年には日独合作映画「新しい土」をJ・Oスタジオとともに製作して、主演・原節子の名を高める役割を果たした。

本稿は「ハマッ子スター」「横浜が生んだ国民的女優」としての原節子を紹介し、横浜出身の映画人・川喜多かしこの関係にもふれたい。

一躍、国民的スターへ

原節子。本名會田昌江は、大正九（一九二〇）年六月一七日に、神奈川県橘樹郡保土ヶ谷町に生まれた。

會田昌江が、映画界に入るきっかけはよく知られている。昌江は會田藤太郎・ナミ夫妻の五女であるが、日活大將軍（京都）の女優である次女光代が、映画監督の熊谷久虎と昭和八（一九一三）年に結婚した事が契機である。家庭の事情もあり、熊谷の紹介で、昌江は昭和一〇年四月に一四歳一〇ヶ月で

日活多摩川撮影所に入社。八月、原節子の名でサイレント作品「ためらう勿れ若人よ」でデビューした。芸名は、同作品で演じた役名「お節ちゃん」に由来する。

原節子が、映画女優として社会的に大きな注目をあびるきっかけとなった作品が「新しき土」である。昭和一一（一九三六）年に日本国内を八ヶ月にわたって撮影し、翌一二年に公開された日独合作映画で、アーノルド・ファンク演出で日独版が、伊丹万作演出で日英版が作られた。そしてこの映画のキャンペーンのため、原節子は川喜多夫妻と、義兄熊谷久虎の四人で、ドイツ訪問を中心とした世界一周旅行に出た。三月一〇月、東京駅で二千人のファンによる熱狂的な見送りをうけて下関に行き、大連に渡り、ハルビンでシベリア鉄道に乗ってモスクワ、そして三月二六日ベルリンに到着。原は映画館での舞台挨拶やサイン会・晩餐会、映画会社やヒトラーユーゲントの視察などのつとめを果たして、五月二〇日までドイツに滞在した。その間『朝日新聞』は、ドイツの反響を「ベルリン特電」として掲載した。

し其の間各劇場で二十回ばかり挨拶し放送はベルリン二回、其他で二回行ひました、ハリウッドではルイズレイナー及びデイトリツヒに会ひました、もつと長く滞在する予定でしたところJ Oとの契約が出来たので早く帰つて来た訳です」。

原節子一七歳。当時主演映画を携えて世界一周をした俳優はいなかった。「新しき土」の製作は日独防共協定の交渉をカモフラージュする意味をもち、キャンペーン旅行は国策の大きな流れにのつたものであった。しかし映画「新しき土」とともにこの旅行は、原節子に対する大衆の熱視線をあつめ、「ハッツスター」を一挙に「国民的スター」にしたのであった。長期間滞在中たドイツでは原・熊谷との別行動がみられ、全行程で同行しているわけではないが、この旅は川喜多かしこ自身の日記でたどることができる（『東和商事合資会社社史』一九四二年刊）。

帰国後、原節子は熊谷久虎とともに日活からJ・Oスタジオに移籍した。一月三〇日、J・Oスタジオほか四社は合併し、東宝映画株式会社が発足し、原は東宝映画専属女優となった。

才媛・川喜多（竹内）かしこ

原節子を「国民的スター」にした「新しき土」の製作者、東和商事の川喜多かしこは、竹内かしことして、明治四一（一九〇八）年三月大阪で生まれた。生後一〇〇日めに東京に転居し、のち

横浜・大連・秋田と「流転の少女時代」を過ごした。大正一〇（一九二〇）年横浜の祖父の家に戻り、フェリス和英女学校に入学。関東大震災で父を失い、神戸に移るが、まもなく復学した。

川喜多の自伝的文章を収めた『映画ひとすじに』（一九七三年刊）によれば、普通科六年を終了した一八歳の竹内かしこは、学校からアメリカ留学をすすめられたが、母と妹二人の生活を考えてこれをあきらめ、上級の研究科に進み、翻訳や英語の家庭教師をしつつ、学業にはげんだ。

アメリカで排日機運が高まるなか、親日家シンドニー・ギューリックの提唱で、いわゆる「青い目の人形」一万二千余体が全米から日本に届いた。その代表であるミス・アメリカと、首都ワシントンDCおよび四八州代表人形の歓迎会は、昭和二（一九二七）年三月一八日、本牧小学校講堂でおこなわれた。竹内かしこは、その終わりにあたって、横浜を代表して流暢な英語で答礼のスピーチを述べた（「お人形さんを並べて華やかな大歓迎会」『横浜貿易新報』一九二七年三月一九日）。また、フェリスの歴史編纂委員の一人として『フェリス和英女学校六十年史』（一九三一年刊）の刊行にかかわっている。「小学校の頃から欧州映画のファンであった竹内かしこが、昭和三（一九二八）年一〇月設立の東和商事合資会社に入社したのは、四年一月である。同社が映画輸入にかかわる会社である



ニューヨークにむかうクイーンメリー号の船上で
左より川喜多長政、原節子、熊谷久虎、川喜多かしこ
昭和12年6月 公益財団法人川喜多記念映画文化財団所蔵

ことは知らなかった。同年秋に社長・川喜多長政と結婚した。

ハリウッド映画全盛の時代、芸術的香りの高いヨーロッパ映画を輸入・紹介した東和商事の仕事は、日本の洋画興行史上、特筆すべきものがあった。戦前のヨーロッパ映画で、今日でも記憶に残る、「制服の処女」「自由を我らに」「望郷」「どん底」（仏）、「民族の祭典」（独）などの名作は、東和の輸入である。また、「新しき土」に加えて、日活映画「五人の斥候兵」（田坂具隆監督／一九三八年）を紹介して、ヴェネツィア国際映画祭のイタリア民衆文化大臣賞を受賞させた。川喜多かしこは、映画「ワルツ合戦」（一九三五年）の主題歌「ドナウの岸辺に葡萄実れば」の日本語訳もしている。戦後にわ

たつて映画をつうじたヨーロッパ日本
本の架け橋となった川喜多かしこは、
平成五（一九九三）年に亡くなった。

スターと女優のあいだ

原節子は、一〇八本の映画に出演したが、敗戦までの一〇年間で五二作、戦後五六作。「デビューから途端に主演」をつとめたが、助演にまわる映画もあった。演技への評価は芳しくなく、「原節子イコール大根女優という定評でさんざんたたかれ」た（原節子「早春夜話①」『東京新聞』一九五九年二月二〇日夕刊）。しかし本人はいたってサバサバした性格であった。

戦前は、良家の息女、タイピスト、中国人女性、などの役でスクリーンに登場したが、「上海陸戦隊」（一九三九年）、「ハワイ・マレー沖海戦」（四二年）、「決戦の大空へ」（四三年）などの戦時国策映画にも出演した。

戦後、原は「安城家の舞踏会」（吉村公三郎監督／四七年）と「お嬢さん乾杯」（木下恵介監督／四九年）で旧華族の令嬢を、前者は悲劇的に、後者は喜劇として、いずれも新しい時代へ、新しい自分へ、と前向きに選り取る役を演じた。次いで「青い山脈」（今井正監督／四九年）で、港町の古い慣習に対して、戸惑いつつも信念を貫く、新時代の体現者としての女性教師・島崎雪子を演じた。肩の張った白いブラウスは、旧体制に立ち向かう雪子の強い意志を表していた。主題歌が大ヒット

トし、戦後民主主義の清冽な印象を長く伝えた「青い山脈」は、原節子が国民的支持を得た映画であった。

「青い山脈」の次の出演作が、小津安二郎監督と最初に組んだ「晩春」であった。原節子は、小津作品をつうじて語られることが圧倒的に多い。監督としての小津は円熟期をむかえており、原の演技を、独特なテンポの演出でつみこみ、独自の世界観のなかに活着させた。役者に対して絶対的な演出を貫くことで有名な小津の指導を得た原は、演技派と呼ばれる役者に「化ける」ことはなく、評価の高い作品でも、原の演技が特段高く評価されることはなかった。原は小津の奏でる映像のハーモニーのなかでもっとも輝いた。しかし小津作品への原の出演は、わずか六作にすぎない。

小津作品は、生前から国内では評価があったものの、国際的評価は必ずしも高いわけではなかった。しかし一九七〇年代から内外評論家による再評価がすすみ、一九八〇年代後半から、ビデオなどをつうじて作品と接する手段が整って、作品の細かな場面まで分析的評価は、映像のなかにこめられた小津の精緻な意図を分析することで支えられている。そして小津作品の国際的評価の高まりとともに、原節子の「国民的女優」としての位置も固まっていたといえよう。

原節子の横浜での足跡

「ハマッ子スター」原節子の出演作品で横浜を主たる舞台にしたものは、おそらく「美はしき出発」（一九三九年）のみと思われる。監督は七作品と原をもっとも多くスクリーンに登場させた山本薩夫である。

原は画家を夢見る姉・北條都美子、高峰秀子扮する活発な妹・奈津子と、母と兄の四人で、山手の家で豊かな暮らしぶりである。しかし金銭的な支援助者である叔父の仕事が不如意となり、北條家は働く必要に迫られる。しかし奈津子をのぞいては呑気で、事態を深刻に受け止められない。その後いよいよ切羽詰まった都美子も職探しに山下町のオフィスをたずね歩く。しかし予想だにできなかった薄給に呆然として、面接者に怒りをぶつける始末。金銭的に困っているとさえ思えない、優雅なガールポハットにハイヒールを履いた都美子のすがたは、アスファルトの舗道を空しく行き来する……

この映画は、浮き世ばなれした山手に住む北條家の生活ぶり、横浜港、フェリス女学校、フェリス坂、山下橋、山下町、ライジングサン石油、スタンダード石油などの光景をベースに進行する。奈津子と山中湖で親しくなり、怠惰な北條家に対して厳しく意見する男子三人組の職場はスタンダード石油社屋で、その内部も撮影されている。横浜を舞台とした出演作であるが、

「美はしき出発」の作品としての評価は低く、原節子の評伝類でも、ほとんど言及されないものとなっている。

沈黙の半世紀、そして……

原節子がスクリーンから姿を消した時代、映画はフィルムが映画館を巡回する数ヶ月の生命で、その後は名画座などでの再上映を待つしかなかった。名画座は、大都市にはあっても地方都市では乏しく、映画産業斜陽化のなかで映画館は激減し、上映が終わった映画はテレビ放映を待つ以外にない時代が続いた。同時代人としての原節子を知る日本人が減る一方で、ビデオ、DVD、ケーブルテレビなどの視聴手段が多様化して、原節子と出会う新たな環境がととのっていく。

映画の評価は、時代によって変わる。小津作品の評価も不変ではないだろう。作品と出会う新たな環境をえて、「伝説の女優」は、いまこそ「伝説」でない、正当で掛け値のない評価を、後世の者たちに求めているように思われる。それこそが、「大根」と世評でたたかれながらも「そのたびに、『ああ、そんなものか』と思うだけでハラを立てたこともないんです」と、戦後まで職業意識に目覚めることなく、「何だか世間さまに申しわけないような気が」する（前掲「早春夜話①」と開陳する、原節子・會田昌江の正直さ、誠実さ、おおらかさと考えるからである。

（平野正裕）